

よいお年を！！ & あけましておめでとうございます！！

小島動物病院アニマルウェルネスセンター
院長 小嶋大亮からのお手紙です。

皆さまにおかれましては師走を迎え、ご多忙の時期をお過ごしのことと思います。今年も一年、当院を支えて下さり、誠にありがとうございました。

今年は暮れと新年のご挨拶を、この手紙にまとめて書かせていただきます。

当院では2022年の新年を迎えるにあたり3つの変化が起こります。その3つの変化について、背景を含めて皆様にお知らせし、ご理解とご協力をお願いする次第です。少々お時間をください。

左ページにお示しします変化の背景には様々な社会情勢がありますが、前向きに、そして積極的に課題解決に取り組みたいと思います。

また、このお手紙の中で、最も強調したい点として、今回直面している課題に挑戦できるのは、本日まで当院を支えて下さっている皆様のおかげであります。これからも小島動物病院アニマルウェルネスセンターとしての診療は変わることなく、より丁寧な、日頃より当院を支えて下さっている皆様に、引き続き、地域に根ざした動物病院として尽力致します。

コロナ禍を通じて、先進国を中心に世界中で動物医療はエッセンシャルワーカーであることが認められました。私達は社会インフラになった自覚と責任を持って日々努力したいと思っております。どうぞ応援のほどよろしくお願い致します。



Point 01 平日の朝と夕の診療時間を30分短縮 診療時間の変更

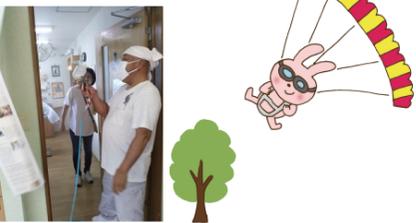
平日の診療受付を午前8時から午後6時30分までとさせていただきますでしたが、午前8時30分から午後6時までとさせていただきます。

皆様もご承知のように、昨今の働き方改革による労働時間の短縮が求められております。私共、動物病院業界のおかれている状況も同じであり、女性主体の職場における長時間労働は、若いスタッフや子育て世代のスタッフの離職の要因の一つであると考えられております。

そのような背景から、最初の取組として数年前より新潟市中央区で夜間病院を共同運営し、対応してまいりましたが、夜間病院の社会的認知度が十分に向上したことで、当院個別の対応も進める段階に至りました。

当院スタッフの皆様への献身的な対応は、私から見て当院の理念である『Bond based management (絆に基づいた運営)』には欠かせないものであり、社会の変化に対応していく必要があります。

また何より私がより良い診療を追求、継続するために、スタッフの協力を必要としております。彼らを、引き続き診療のパートナーとして大事にし、人間味豊かな成長を支援し、共に動物達の健康を通じて飼主様の幸せに貢献致します。ご理解をお願い致します。



Point 02 動物の皮膚がん サポートセンター

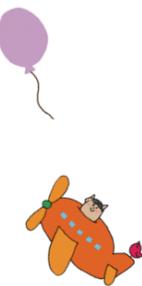
皆様も待合室で感じられる場面があるかと思いますが、当院は難病が疑われ、どうしたらよいのかと迷った動物を診察する、いわゆるセカンドオピニオンが多い病院です。コロナ禍になり、巣ごもり需要となって多くの方が動物を飼育するようになったことが報道にあります。

1年半は特にご相談が多くありました。いっぽう、受診控えも同時に問題となっており、「もう少し早く診察させていただければなんとか出来たのではないかと」いうことも多くありました。特に皮膚がんを患った動物は、日に日に悪化する姿を飼主様が直接的に感じるもので、解決に至らないことはとても苦しい思いでありました。

そのような背景の中で、当院は、去る8月に公益財団法人新潟市産業振興財団(新潟市)財団)主催の公開審査会において優秀賞に選ばれ、新潟市より全国へ発信する『動物の皮膚がんサポートセンター』を設立することになりました。本センターは私達の強みである「病理専門医による確定診断」「皮膚科と腫瘍科認定医」「多様な動物達への診療」「ご家族様への温かみのある対応」を組み合わせた国内初の動物医療モデルとして採択されました。

当院の理念である『PCAP(ヤマの)トワリを中心にした動物の診療』を皮膚がんに細分化することで、一般の方にも理解できるようにし、現状の動物医療を少しでも改善したいと思っております。

今まで以上に、新潟市のみならず県内全域及び近隣の飼主様の来院が増えることが想定されますが、ホームページでもお知らせしておりますように、当院では「CH」抗菌ワイドや複合型光触媒チタンテックスによる万全の感染症対策を施しておりますので、引き続き安心してご来院ください。



Point 03 人間力を表現する病院システムとは デジタル化への移行

病院のデジタル化で代表的なものは電子カルテですが、今まで採用してこなかったのは、飼主様に対面での人間味ある「膝詰めの診療」をご提供したいとの考え方からでありました。

しかしながらコロナ禍になり、人と人が接触する機会がリスクであることから、せめて受付では動物をモチーフにしたアクリル板で笑顔をつなぎたい、と考えて取り組みましたが、今後の社会情勢を踏まえれば、やはり更なるデジタル対応が必要と考えました。しかし、電子カルテだけを導入しても温かみは失われるだけではと危惧し、どうにかできないかと考えました。

そこで、当院の温かみを保ち、かつ非接触型による診療モデルを構築するためには、電子カルテ・医療機器・プレゼンテーションを包括的に連結することで、日頃の健診結果を時間軸で捉え、分かりやすい説明をご案内することができ、より飼主様に治療を受けている意味を感じていただけるのではないかと考えました。

よって、動物の健康維持を目的とした『Animal Wellness』を更に発展的に促進するために、『デジタルを用いた人間力を表現する病院システム』を構築することにしました。

当院、不慣れたデジタル環境からトラブルが発生することも想定されますが、ここにしかない次世代型の動物医療を皆様にお見せしたいと考えています。

